

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

第12次連合ボランティア報告

● 安全確認の励行が「つなぐ」の生命線

「私たちの最大の使命は、快くボランティアに送りだしてくれた、『職場の仲間・家族・大切な人』の元に無事に帰還すること」という言葉を胸に第12次連合ボランティアは始まりました。実際、作業現場では高所からものを落とすとき、仲間の頭上に釘の出た大きな柱などを通過させるときは声を掛け合い、危険を回避することができました。また慣れてくると忘れ物が多くなるので、毎日作業前に身支度を確認すること、憶測で作業をしないこと、休憩時間はみんなで一斉にとることが安全な作業につながることを現地での経験から学びました。それから、海外からのボランティア参加者との共同作業もありコミュニケーション、現場の明るい雰囲気づくりが安全には何よりも大切であると痛感しました。

● 頼りにされています「赤い帽子の救援隊」

現地のみなさんは、赤い帽子の連合の救援隊だとわかると「おつかれさま、今回はみんなどちらから来てくれたんだい？」と声をかけてくれました。これまで第1次～第11次と続いた全国からの連合の働きぶりに現地のみなさんはとても感謝しているようでした。

私たちが携わった作業は、体育館での支援物資の仕分け、避難所の食事作り、個人宅の床はがし、土砂上げ、散乱した家具の整理、側溝の土砂あげなど多岐にわたりました。

支援物資の仕分け作業では、物資でいっぱいだった体育館をなんとか整理し、子どもたちが体育館を通常のように使えるようになりました。「明日から体育館がつかえるね！」と喜ぶ子どもたちの声を間近で聞くことができました。個人宅の家具整理では3月11日以来、時が止まり手つかずの部屋の中から家主さんがどうしても探し出してほしいという、印鑑、権利書、通帳、数珠などを探し出すことができ大変喜ばれました。



【カレンダーの日付が3月11日のまま】

● どう伝えていくか

今回のボランティアでは全国からの仲間との出会い、汗を流し、現地の方からもたくさんのパワーをもらいました。

連合気仙地区協議会事務局長の吉野さんは「今、話したことは3月11日に私が見た事実です。地震や津波のことを風化させないためにも、先生たちはこのことを子どもたちに伝えてほしい」とテレビ・新聞の報道では知ることができない、震災当日の惨状を語ってくれました。また、住田交通の運転手さんは「全国から来てくれた皆さんに私のできることは、被災地を案内し津波の話をするだけです」とボランティア作業終了後、当初予定にはなかった陸前高田の町へバスで案内していただきました。現地の方が教職員の集団である私たちだからこそ、これからの社会を担う子どもたちにこの津波ことを伝えていってほしいという思いが強く感じられました。「10年後、復興した姿を見に、また岩手に来てください」と岩手の皆さんが必ず言われることが心に残りました。



【第12次ボランティアメンバー 五葉小学校正門にて】

ボランティア参加者は「ここで見聞きしたこと、頭を駆け巡った思いをどう形にできるかは、正直見当が付きません。でも将来のため、みんなの未来のためにも被災地の状況と復興に努力しているすべての人々の活動を伝えていきたいです」と未曾有の震災、津波被害を子どもたちに伝えていくことの使命の重さを受け止められていました。

また、今回の震災では学校が避難所に、校庭が仮設住宅の用地に、廃校がボランティアのベースキャンプになるなど、地域において学校の存在が見直されてきていることも伝えていきたい事実です。

最後に、地元岩手県教組の参加者から「岩手の復活にはまだまだエネルギーが必要です。みなさんこれからもエールをお願いします」というメッセージをいただきました。

ボランティアに参加したみなさん、まだまだつらいニュースも多いですが、岩手で同じ釜の飯をたべ、汗を流した仲間がいたことを思い出しながら、被災地にエールをおくり続けましょう！



【どんな支援ができるのだろうか？（陸前高田にて）】



【共に汗を流した40人の仲間のメッセージ】